

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	折にふれて : 短歌
Author(s)	平戸, 裕人
Citation	龍南, 234 : 36 - 37
Issue date	1936-06-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7330
Right	

折にふれて

古里にて

天草灘の白波寄する磯に立ち雲耶山耶の詩を吟じ居り

療養生活

試験管に満てるわが血をまざまざと見つめてしばし心亂れつ

療院に眞向かふ小島の燈臺の消えつ明りつ夜もすがらなる

根深き病斷つべく吾が爲に母が採り來し牡蠣を食みけり

平戸裕人

憲吉^{さし}大人が危篤^{きどく}の頃はわれもまた同じ病に苦しみ居りき

時 に ふ れ て

「戒嚴令帝都に布^しかる」の號外を手にしたるまま落著かず居り

今やすでに帝都の治安は維持さると報するラヂオの聲たかだかし

晩 春 初 夏

ふと、鋪道に仰いだ五月の蒼天！ あゝ、私の意慾が散漫となる

はつらつと日をはね返す砂濱で、しきりに血汐の躍動を感じる、初夏！

ぶいと暗くなつた瞬間——さんらんと、プリズムの屈折光線が網膜を射る

(實驗室)